

戦没者遺骨を含む土砂、新基地建設に？ 宗教者が共同声明 沖縄戦犠牲者を二度殺すのか

沖縄県名護市辺野古への国が進める米軍新基地建設に絡み、防衛省は大量に不足している埋め立て用土砂の採取を、沖縄戦の激戦地だった県南部で計画していることがわかった。採取予定地周辺では戦没者のものと見られる遺骨が今なお見つかっており、12月10日には宗派を超えた宗教者たちが「人を殺す施設の建設のために遺骨を含む土砂を使用するのは、戦没者を二度殺すことだ」などと批判。計画撤回と遺族への謝罪を求める共同声明を発表した。



辺野古沖への投入土砂採石場の候補地の一つ。緑の森がすっかり伐採されている。(提供/沖縄ドローンプロジェクト)

仏教やキリスト教の宗教指導者

8人が同日、東京の参議院議員会館で記者会見。防衛省が県に提出した基地用地の埋め立ての「設計変更」申請で、「岩スリ」の県内調達先の大部分が現行計画にはない南部地区（糸満市・八重瀬町）に追加・変更されていることが明らかになったことなどを説明した。

共同声明では「本島南部には今でも多くの遺骨が残存…遺骨は死者の尊厳そのもの」とし「今、菅義偉首相が、真つ先にすべきことは遺骨の収集であり、遺骨を遺族の方々に一日も早くお返しすることです」と訴えた。この時点で、300人以上の宗教関係者や平和団体関係者が賛同署名していた。日本キリスト教協議会の金性済総幹事は「忘れてはならないのは民間人と兵士というカテゴリーだけではなく、朝鮮半島から強制連行されてきた徴用工、旧日本軍の『慰安婦』…今や簡単には判別できない遺骨にはそうした遺骨がまじりあっている可能性の重さを、改めて沖縄戦とは何であったかをふり返るべきだ」と述べた。沖縄出身の平良愛香牧師は「沖縄ほどの土地にもウチナンチュウ



ガマで遺骨を示す具志堅さん。(提供/日本山妙法寺・武田隆雄上人)

の血が染み、骨が埋まっている。その象徴となる場所が南部だ。その土を掘るといのは、ウチナンチュウあるいは沖縄に連れてこられたさまざまな人々、米兵も含めて、その人たちの死をないがしろにすることだ」と指摘。沖縄人が望むのは基地被害をなくすことだけではなく、「二度と沖縄を戦争を生み出す島にしてはいけない。加害者にならないということだ。だから辺野古の基地建設に皆がノーと言った。そんなところに戦死者たちの血や骨が使われてたまるものか」と悔しさをにじませた。

すでに始まった採石準備

地元で38年間、遺骨の収集と遺族に返す活動が続けてきたボランティア団体「ガマフヤー（遺骨を掘る人）」の具志堅隆松代表（66

歳・那覇市在住）は取材に対し、「私たちが継続して発掘作業を続けてきた森に先日行ってみたら、周りの木々がすっかり伐採されて採石場になっていた。防衛省が新たに採石候補地に指定した南部ではこんなところが何カ所もある」と憤る。

県も糸満市米須の採石場で戦没者の遺骨と見られる複数人分の指やあご、歯の骨を確認して収容したことを明らかにし、「来年度の鑑定にまわす予定だ」という。

こうした実態について沖縄防衛局報道室は「南部からの土砂採取計画はあくまでまだ県への承認申請中であり、具体的な採石場も含めて何も決まっていない。変更計画にある採石量も、県内の各採石場に可能な供出量をアンケートで尋ね、糸満市などでの採取可能量を集計したにすぎない。樹木の伐採などについては業者の行為なのでこちらでは把握しておらず業者に聞いてほしい」との回答だった。糸満市で今年9月の施業案認可を取り、採石のために森を伐採した鉱山会社に3日間、朝昼晩と電話し続けたが応答はなかった。菅義偉政権も防衛省も、沖縄戦の歴史を認識することなく、机上で採石計画の図面を引いたのだろうか。

本田雅和・編集部